

# 無字仏教と浄土教

藤 原 了 然

(一)

ここである無字仏教とは、いうまでもなく有字仏教又は文字仏教と対句をなすもの、謂である。もとより、無字仏教というにしても、文字仏教というにしても、あまり耳なれない言葉であることはいうまでもない。然し、今敢えて、このような言葉を取上げるについては、いさかその理由がないではない。端的にいうならば、それは今日の仏教又は仏教学が直面している幾多の壁に対する反省を促がすにあるとでもいうべきであらうか。

無字仏教というものの、それはかの禪家で重視されているところの「不立文字」とは可なりその趣を異にしているものであり、いいかえるならば、それは「文字によつて表現しえない仏教」という意味ではなく「文字なき時代の仏教」又は「文字化されない時代の仏教」という意味である。インドに於て、文字なるものが一般化したのはどの時代であるかについては異論を免れないところであらうが、少くとも釈尊在世時代に於て、文字なるものが思想の表現又は伝道の方法として常用されていたとは考えられないはずである。インド

がその文化の起源の古さとその内容の高度性にも拘らず、肝腎の經典の伝承なるものが、久しきに亘つて、口から口への形式を常套としていたことは、かなり後世にまで及んでいたようである。

ただそれだけではない。そもそも釈尊の説法用語なるものが如何なる言葉であつたかについてさえ定説が見出されていない。このことは勿論、これを推定する資料の貧困にもよるであらうが、インドの特殊な階級制度、ベータを下層階級が誦することすら禁ぜられていたインド、然も広大な地域を占めるインドに於ける教養のアンバランス等、たとえ仏教が根本的立場に於ては四姓平等の立場をとるとはいふものの、實際問題としての説法教化に於て、釈尊が、いわゆる対機説法の立場から、いろいろな階級用語、いろいろな方言を採用されたであらうことは、容易に想像されるところである。

しかるに今日、われわれが仏教を学問しようとする場合、その第一資料である經典や論書について考えてみると、これが文字化されたのは少くとも紀元後といわなければならぬ実情であり、大乘經典ともなれば更に後期に属すると推定さ

れるに於ては、釈尊成道後の數百年の間は、専ら暗誦口伝の仏教であつたはずである。しかもこの暗誦口伝の内容の信憑性ともなれば、幾度か繰りかえされたと伝えられている經典結集の事實がその経緯を物語つてゐるのではなからうか。といふのは、經典の結集の経緯として伝えられているところより推すならば、結集なるものは一面に於ては、仏教の整備もしくは組織化ということも考えられるのであるが、更に直接的には仏教々団内に於ける異議の統出や疑問の發生の対処に動機していることは疑いのないところであるからである。

このように考えてくると、成文化又は文字化された經典や論書が成立するまでの數世紀間に於ける仏教の傳承は、かなり複雑な経路を辿つたものといわなければならないはずである。無字仏教とは、時期的には、このような時代の仏教を意味する。

(二)

想うに、二千數百年間に亘る仏教伝持の足跡には幾多の轉換期があつたはずであるが、その最初にして且最大であつたものは、いうまでもなく釈尊の入滅ということであろう。記伝の叙述しているところの第一結集なるものも、この釈尊の入滅を最も直接的原因とするものであるが、内容的にいえば、それは人中心の仏教から法中心の仏教への轉換といえるであらう。

もし疑あれば、當意即妙、即座に明快なる指南を受けうる、然も解行に亘つて生きた鑑に常に接しえた、釈尊在世の教団人が、仏涅槃の現実に當面した時の悲痛さは想像にあまるものがある。たとえ釈尊在世の時に、釈尊自らの語として幾度か、仏入滅後のことに關して「法燈明自燈明」の垂示が繰返されていたとしても、又涅槃經の四十卷本に四依として「法に依つて人に依らず、義によつて語に依らず、智に依つて識に依らず、了義經に依つて不了義經に依らず」と、法の本質に對する大本を示しているにしても、このことはまことに止むをえない事實といわなければならないであらう。しかし、仏教々団の人々は、一部の不心得者を除いて、大勢としては釈尊の遺誡の趣旨を堅持して行つたようである。そこに仏教々団の整備と仏教々理の組織化が招来されるという結果を生ずるに到つたのであるが、しかし、このとき心ある仏教々団の人々が、最も心を砕いた關心事は、釈尊の説かれた「法」の本質如何んということであつたことは多言を要しないところであらう。この間の消息に關して現存の記録は多くを語つていない——事實は語りえないともいえるであらうが——けれども、或は教団護持、伝統保守の護教的立場から、或は因習脱皮、進取革新の情熱に驅られて、「法」の本質追究に向けられた關心は、恐らく筆舌のよくことを尽すところでないという外はあるまい。

更に、この場合、「法」の本質の追究に當つて、教団人に

対して大きな障害となつたものは、釈尊の教説の多くが対機説法の形式をとつていたことであらう。応病与藥、臨機応変、甲に対しては甲に即して、乙に対しては乙に應じてという説法は、最も勝れた説法形式であり、また余程の充実した内容の持ち主——釈尊の如き——でなければ容易にこれをなしようところではないが、反面に於て、このような対機説法の根源となつているものの究明となると、それは多くの困難が予想される。八万四千と称される仏教々門の多岐性は、もとより釈尊自内証の深さと幅に起因するものであらうが、一面に於ては、この対機説法的形式の教説に約束された必然とも考えられうるであらう。

今日では、いわゆる原始經典という総称の下に、ニカーヤや阿含等の名があげられているけれども、實際にその内容を検討して見ると、たとえば、漢訳増一阿含第二十四に見うけられる文荼(ムンダ)王の記事や、雜阿含第二十三、第二十五等に見出される阿育王の記事等の如きは、どう考えてみても、後代の附加と解する外は説明の仕方のないものであり、従つて阿含經の成文化というものが、かなりの後世に属するものであることは想像に難くないところである。尚これに類似したことは阿含經典の中には、かなり数多く見うけられるのであるが、要するところ、このような事実と直面して見ると、現在の原始經典の成立までのかなりの年月の経過と釈尊教説の伝持に伴う領受内容の変遷——原理的には変遷はない

であらうけれども——といったものは想像以上のものがあるであらう。

### (三)

こゝで唐突なことをいうようであるけれども、もし想像を逞しくして、仮りに釈尊の在世時代に、今日ほど文字文化が発達しており、釈尊自らが筆を取つてその自内証を記録に留めておかれたら、いったい、どんな文章が吾々に伝えられていたであらうかということを考えて見たいのである。それは恐らく六事成就といったような紋切り型の現存經典とは可成り趣を異にしたものであつたではなからうか。又、更に仮定をすゝめて、釈尊在世の時代にテープレコーダーが存在していて、釈尊のなまの肉声が今日に再現出来るとしたら、われわれはシセキの間に仏陀に接するの感を懷きうるであらうし、従つて、われわれの仏教觀も果して現在のまゝでありうるだらうか。

もちろん、文章と口説とは各の長短を免れないものがあつて、何れを優とし、何れを劣とするが如きことは許されえないことである。丁度、名講演の原稿が必ずしも名文ではないように。

何れにしても、かく考える時、人或は釈尊自筆の文章の現存しないことを、或は更に釈尊の肉声が今日にまで保持されていないことを千古の痛恨事とも考えるであらう。たしかに

ある意味では、われわれもこのことに共感なきをえないものがある。

想うに二十部の分派にしても、実は釈尊自筆の教訓がなく、又釈尊の肉声の伝持がありえなかつたことに起因するともいえるであらう。

しかし、反面よりするならば、無字仏教であつたが故に、仏教は限りなき発展をとげたのではあるまいか。無字ということに伴うアイマイ性はその裏側から見れば教理解釈の弾力性を意味すると共に、法の領受に向つて思索の深化を要請する。恐らく、大乘仏教の成立と開展との如きも大きくこのことに起因するのではなからうか。如何に想をめぐらすにしても、今日われわれが原始經典と称して——實質的にやはり原始經典の名にふさわしいものであるが——いるものから、直接的に現存の華嚴經や法華經等の大思想網を引き出すことは容易なことではないはずである。いゝかえるならば、無字なるが故に、限りなく、いゝ意味での自由に思索に沈潜することが出来、又そうせねばならなかつたところに大乘仏教の誕生がありえたと称して果して過言であらうか。従つて、大乘仏教の特性の随一とされている菩薩思想にしても、又、この思想の基盤となつている、時間、空間に亘る世界觀や人生觀に関する広大な構想にしても、又、涅槃系統の經典に見うけられる仏性思想、仏教瑜伽系統の經典に現われている心識論等、その成立と展開はすべてこれ無字仏教なればこそその所産

と解さるべきではなからうか。

われわれは、大乘仏教の興起（淨土教を含めて）を、釈尊の入滅の転換期につぐ第二の転換期であることを信ずるものであるが、この大転換は無字仏教に由来すること大であることを想わせられるのである。

#### (四)

翻つて日本仏教の新宗派の開創者が最も心肝を砕いたことは、その所説の信条に関する経証と伝統の明示ということである。法然上人が心血を注がれたところも、実に口称念仏の人師と経証との明示ということであつた。それはその教説の眞理性を相承の確證ということに求めて、伝統を重んずる宗教の世界、尨大な文字經典を擁し、その中には體質の異なる如き思想体系を認めざるをえない場合に於ける必然の努力と解することが出来よう。

しかし、もし法然上人の出世を無字仏教の時代におきかえるとするならば、その立教開宗の書たる選擇集は、今日われわれの手にするところの經文集の体裁とは凡そ貌の異つたものとなつていたことは疑いえないところであらう。それは、恐らく、かの大乗經典式な、自由奔放な叙述をもつて物されていたものではあるまいか。従つて、源智の選択要決に列挙されているが如き、選擇集に対する十種の論難といつたものも提出されなかつたのではなからうか。勿論、別な論難が惹起

されたかも知れないが。

冥想せる哲人の学匠である法然上人の後継者鎮西上人は、その著、徹選擇本願念仏集の中で次の如くいっている。

「沙門某甲、昔聖道を学せし時、聊か彼の浄仏国土成就衆生の義を習ひ伝へ、今浄土門に入るの後、又この選擇本願念仏往生の義を相承す。二師の相伝を以て、聖教の諸文を見るに、その義更に以て教文に違はず。単聖道門の人、単浄土門の人は之れを知るべからず。聖道浄土兼学の人これを知るべし。此の意を得てより、一切の大乗經を披き、一切の大乗論を見るに、隨喜の涙禁じがたし。此れ則ち聖教の源底なり、法門の奥藏なり、仏菩薩の秘術なり。此の書の上に戴せ尽くすべからず、委しくは口伝を聞くべし」

この一文は、理論的又は通仏教的立場から、選擇本願念仏集に説かれているところの念仏往生の義が、一代仏教の帰結であることを主張する名句として、古来より宗学者間に於て尊重されているところのものであるが、その聖浄等同を強調するに當つて、単に文証や語句にのみ着眼することなく、その所学の空般若思想に対する深い造詣に立つて、「聖教の源底」、「法門の奥藏」、「菩薩の秘術」といつた観点から他力念仏の真髓を説いていることは、極めて意義深いものがある。又、それ故に鎮西上人の教学が法然門下に於て權威を有することになったともいえるであろうが、浄土教的表現によるならば、よく釈尊出世の本懷に徹したともいえるであらう。

う。

想うてこゝに到るならば、われわれは、一面に於て無字仏教なるものに対して少からぬ嫌き足らなさを感ずるものであるが、他面に於ては、無字仏教なるが故に仏教が果した大きな転換とその役割に刮目せざるをえないものがある。

然し、現実は何んといつても文字仏教時代である。特に学問的には典拠の追究が最肝の要事とされている。このことは学問的にはもとより正しいことであるが、仏教又は仏教学の行當つてゐる大きな壁の一つが実はこゝに存するともいえるのではなからうか。識者の間に於て、訓詁と注釈に明け暮れる、ラツキョの皮むき式な仏教学が指弾されるのもこゝに由来する。

願わしきは、有字仏教の中に於て無字仏教時代の思索に対して不断的の留意を払うことである。このことは、必らずしも、經典や論書を「指月の指」と諦観せよというのではない。文字によること以外に仏教の堂奥に近づく適切な方途を知らない或は閉ざされている今日のわれわれは、この文字の骨髓をなしている釈尊精神に対する無字仏教時代の対決を常に座右の銘として、新しき時代に活きるあるべき仏教のすがたに向つて凝視を新たにすべきではなからうか。

そこに途は開けると共に仏教や宗学は新しい息ぶきを開始すると期待することは果して無暴の挙と評さるべきであらうか。

(教授)